

第4部 近代ツーリズムへの助走

第3部「中世から近代へ」の第3章では、16世紀末を区切りとしてルネサンス・宗教改革期の内陸の旅を扱った。この時期のヨーロッパでも、すでに遊びや楽しみのための旅行の先駆者たちの姿が時おり見られはしたが、まだ観光(=ツーリズム)という概念は存在せず、観光目的の旅行といっても、数ある旅の中の例外的な行動に過ぎなかった。

第4部では、遊びや楽しみのための旅行がそれ以外の旅から独立して「観光=ツーリズム」という概念が誕生し、社会現象として認知されていく時代の旅を扱う。時代区分としては、17世紀初頭から19世紀前半の旅客鉄道誕生までの2世紀半ほどの期間である。後述するとおり、本書は18世紀の中頃、ちょうど1750年あたりを「実質的なツーリズム誕生の時期」と想定している。その後、18世紀末期から19世紀にかけて、フランス革命と産業革命という二大革命を経ることによって、ヨーロッパの政治、経済、社会が近代化し、主たる交通手段はまだ馬車のまま、観光の旅は社会現象といえるまでに活発化していく。1811年によやくツーリズムという新語が誕生(最古の使用例)し、名実ともに「ツーリズム(観光)の時代」が到来することになる。

1830年に旅客鉄道が誕生する。鉄道によって旅の在り方が根底から変化し、それ以前とは不連続的かつ急速な発展を始める。本書では鉄道普及以後を「近代ツーリズム時代」と考え、そこへ至るまでの時代を「近代ツーリズムへの助走」としてまとめることとする。

第1章 新しい旅の形

ところで、第3部までは《旅》と《観光》という用語を使い、《ツーリズム》という言葉は避けてきた。第4部で初めて《ツーリズム》を使用するに当たり、これまでの《旅》と《観光》の使い分けと、新たに使用する《ツーリズム》との関係について説明しておこう。

用語としてのツーリズム 旅(旅行も同じ)は目的に係わりなく、あらゆる旅の前提である「移動」に主眼を置く言葉として使用してきた。英語では **travel**、仏語では **voyage** である。他方、観光は、用務等の必要に迫られての旅ではなく、好奇心や楽しみ、保養などのために自主的に行う旅を指す言葉として用いてきた。英語ではまさしく **tourism** に相当する。違いは《観光》は語源的には旅の目的・動機のひとつを指し、必ずしも旅(=移動)の意味を含んでいないのに対し、**tourism** は **tour** から派生した抽象語であり、語源的に旅(=移動)の意味を含んでいることである。

18世紀に入ると、イギリス人がツアー **tour** という新語を創造する。語源はラテン語の **tornum** (ろくろ) である。ぐるぐる回るという語感から、居住地を出発して教養と楽しみのための旅をして戻ってくる行動を言い表すために造語された。それまでの **travel**, **trip**, **journey** などで表す旅とは異質の、用務を離れた楽しみのために行う旅だけを指す新しい言葉を創造する必要があったからである。**tour** からツアーをする人 **tourist** が生まれ(形容詞

としても使われる)、やがて具体的行動の次元から普遍的な概念ないし社会現象を表す用語として **tourism** が派生するのだが、実際にツーリズムという言葉が使用された最も早い例は 1811 年とされている。

かくして生まれた用語としての《ツーリズム》は、ヨーロッパ語として固有の意味と歴史を持っているため、ヨーロッパの観光史を語る日本語の文章で、誕生前の用語が使いにくく、ここまではそのような歴史を踏まえない《観光》のほうを使用してきた。

《観光》は江戸時代の《旅》や《物見遊山》などではカバーできない外来のツーリズムという概念を表現するために工夫された言葉である。易経にある「国の光を観る。王に賓たるに用いるによろし」(訓読み)に由来するとされ(異論もある)、「国の光(良きもの)を観る(観せる)こと」から造語された《観光》は、具体的な行動と抽象的な概念の両方(英語の **tour** と **tourism**) を表現しうる言葉として使用されてきた。ちなみに、「観光」は旅行とは無関係に使用された観光丸(明治維新前にオランダから購入した蒸気船)や観光館(下野佐野藩の藩校)のような例もあり、意図的に旅行の意味で使われたのは、1893 年に外客誘致のために設立された喜賓会 **Welcome Society** の設立目的(…「遠来の子女を歓待し旅行の快樂、観光の便利を教授せしめ…」)が最初の事例とされている。《観光》は最初から抽象語としての **tourism** になじみ、逆に具体的な旅行を示すためには観光旅行 **tour**、人を表すためには観光客ないし観光者 **tourist** のように使うことになる。よって、今後ツーリズムと観光をほとんど同義として使用するが、それぞれの語源の相違からニュアンスの差があり、これについては必要に応じて文中で説明することとする。なお、ツーリズムや観光の語源については、観光学全集①「観光学の基礎」で詳細に論じられていることを記しておく。

1. ツーリズム誕生前夜：17 世紀初頭から 18 世紀中頃まで

16 世紀前半に始まった宗教改革は、統一ヨーロッパに大きな亀裂を残しただけでなく、時代は急速に宗教不寛容の時代に突入し、同じ神を頂きながら新旧キリスト教徒によって血みどろの闘いが始まってしまった。宗教戦争は、学者と宗教界の争いが封建制を脱却して王権確立へ向かう俗界の権力者たちの抗争とからみ、大量の血が流された。とくにカトリック教会の守護者である神聖ローマ皇帝と皇帝選出権をもつドイツ諸侯との利害の衝突、それに周辺諸国の王位継承に関わる紛争や植民地をめぐる戦略も複雑にからみ、17 世紀に入るとドイツを主舞台に、のちに 30 年戦争とよばれることになる長期の戦乱が続く。

ひと言でいえば、17 世紀は近代ヨーロッパ誕生の陣痛期であった。人々は飢饉と疫病と戦乱に苦しみ続け、人口の成長は停滞し、減少した時期すらあった。世紀前半の 30 年戦争は 1648 年のウエストファリア条約によって終結し、同時に 80 年にも及んだオランダの対スペイン独立戦争も新教国オランダの誕生によって決着した。この時をもって新旧宗教対立を主原因とする国際戦争は終止符を打つのだが、その意味するところは、統一原理としてのキリスト教が世俗権力に譲る形で政治と社会の前面から後退し、それぞれ個性を持った国民国家が姿を現してくるということである。

しかし、30年戦争終結後もスペイン・ハプスブルク家とフランス・ブルボン家の覇権争いが続き、その結末は1659年のピレネー条約によってフランスの勝利、スペインの敗北によって終わる。フランスの時代の到来である。

優位に立つフランス 17世紀後半はフランス文化の優位が確立されていく時期でもあった。長年の戦争を通じてフランスの絶対王権が強化され、幼少で王位を継いだルイ14世（在位1643～1715）は、摂政マゼランの死亡（1661年）を機に親政を開始する。フランスではこの時期を境に社会が落ち着き始め、古典主義時代と呼ばれる安定期に入る。マルク・ボアイエは、古典主義の時代には、16世紀後半以降に見られた旅のブームは去り、低潮期に入ったとする。太陽王と呼ばれたルイ14世は、華麗なヴェルサイユ宮殿を建造して宮廷をここに移し（1682年）、廷臣たちも移り住んで、ヴェルサイユとパリの外への旅に出なくなったのだという。ヴェルサイユ宮殿はヨーロッパの王宮のモデルとなり、知性と美的感覚におけるフランスの支配が承認され、フランス語の他言語に対する優位が確立していった。

ポール・アザール「ヨーロッパ精神の危機」は、17世紀から18世紀への移行期にヨーロッパ精神は危機的状況にあり、「直接の源であるルネサンスとそれが準備したフランス革命の間で、思想上これほど重大な危機はほかになかった」と考える。アザールの言葉を借りれば、「…〈理性派〉と〈宗教派〉がヨーロッパ全思想界の面前で人心の争奪戦をくり広げ、異端は孤立状態を脱して隠れ家から現れ、弟子を作り、威張りだす。攻撃側が次第に勝利を収めはじめたのである。人類という大家族を収容しきれなかった古い建物の解体作業が始まったが、未来都市の土台はまだ用意できていなかった。新派の哲学者たちは、神への義務とか君主への義務とか、総じて義務の観念にもとづく文明のかわりに、個人の良心の権利とか、批判の権利、理性の権利、人権・市民権とか、総じて権利の観念にもとづく文明を作ろうとし始めたのである…。」（まえがき、野沢協訳）

このような時代背景は、観光にどのような影響をもたらしたであろうか。17世紀は、ヨーロッパが世界制覇に向かって歩み始め、植民地経営をめぐる問題がヨーロッパ主要国間の紛争に直接からむ政治の季節でもあった。そうした時代にあって、旅と観光は質、量、行動半径ともに、拡大発展をはじめるのである。

時代の伏流は、観光現象という海面にも波立ちを与えていた。ツーリズムという言葉は、1811年に英国の雑誌「スポーティング・マガジン」で使われたのが最初とされている（オックスフォード英語語源辞典による）。用語が定着するかなり前にその用語が示す現象が出現しているのが普通であり、ツーリズムの始まりは、ヨーロッパ人のツアーが急速に広がりを見せる1750年頃とするのが妥当であると筆者は考えている。

知的エリートの旅

ルネサンスと宗教改革を経て聖地巡礼は下火になった。巡礼には王侯貴族も参加しないわけではなかったが、基本的には庶民の旅の形態であった。死の危険さえともなう巡礼行の艱難に耐えてまで免罪符を望む意欲も理由も減退し、さりとして庶民階級には巡礼以外に

旅をする動機も経済的・精神的余裕もなかった。それゆえ、17世紀の自発的な旅は必然的に文化的、経済的エリートだけのものになり、旅の主たる目的地は古代ローマとルネサンス文化のイタリア、そして新たに文化先進国として台頭してきたフランスであった。

第3部第3章で、16世紀後半に生きたフランスのモンテーニュを最初の観光旅行者であるとし、彼に代表される知的観光旅行者のために作られたシャルル・エティエンヌの本格的な旅行案内書の登場をもって観光旅行の始まりと見做した。ボアイエの「総合観光史」によれば、その後自由意思による旅は次第に知的・学問的な傾向を強め、とくにゲルマン（ドイツ）系の人々の間でペダンティックな興味が表に出る傾向が強かったという。ボアイエはその事例としてドイツ、オランダ、デンマーク、スイスなどのドイツ語圏で刊行されたラテン語の旅行ガイドブック類を列挙する。ガイドブックといっても、道路地図、旅行記、見所解説など様々なタイプのものを含み、1574年から1629年までに発行された9種について説明を加えている。1640年以降は、フランス人がフランス語でこうしたガイドブック類の発行を始めるが、そのほとんどがドイツ系のラテン語ガイドブックからの翻訳や模倣に近いものであったという。これらはいくまでも旅好きの知識階層のためのもので、主たる対象はドイツ人であった。ドイツ人の旅好きは昔からであるが、当時の彼らの旅の仕方やメンタリティは相当にユニークであったらしい。ボアイエとポール・アザールが自由思想家サンテヴルモン（1614~1703）の無国籍的な喜劇「サー・ポリティック・ウッドビー」の同じ個所のドイツ人登場人物のセリフを引用して、17世紀末のドイツ人の旅行を次のように描いている。

…ラテン語をおぼえると、私たちはすぐに旅の準備にかかります。まず買い込むのはいろんなルートを教えてくれる『旅行案内』で、その次は各国の名所を紹介した小型の本です。文人なら家を出るとき、何も書いてない立派な装丁の本をもってゆきます。これは〈交遊録〉^{アルバム・アミカル}とって、行く先々で学者の家を訪問したら必ずこれを出して、サインをしてもらおうのです。（アザール、野沢協訳）

ちなみに日本にやってきたエンゲルベルト・ケンペル（1651~1716）も、若いころ「当時流行していたサイン帳を持ち歩き、その頃出会った人々のサインや言葉をもらった」ことが記録に残っている。（「ケンペルのみた日本」 p13）。

ボアイエは彼らの旅行ぶりをいくつもの文献によって紹介する。フランスへの入国にはフランドル経由、ストラスブール経由、ジュネーブ経由が好まれていた。南仏に行くからでは遅いので、パリかオルレアンでフランス語の勉強を始め、プロヴァンスやラングドック訪問に備えるのが17世紀の北ヨーロッパ人観光旅行者の常であった。旅人達は旅程に沿って珍しいもの、興味深いものを見ながら行く。この地でいかなる戦いが行われ、いかなる事件が起こり…という具合で、要するにフランスの地理や歴史や政治、フランス人の習慣などなどを前もって勉強しておくのが旅に必須の準備なのであった。その様子は20世

紀のアメリカ人や日本人が、憧れのロンドンやパリやローマに旅する様に似ているかもしれない。

なお、ガイドブックの内容は、18世紀を通じて相互に自由に他書を引き写したり、真似たりしており、1776年に地理学者のドニが独自旅程のガイドブックを出した時に、その序文でそれがいかに大変だったかを語っている。「…快適な我が家を離れて暑さや雨や雹に晒され、様々な危険を顧みずに取材するのは大変な労苦である。書き写せば済むことを、わざわざ金と労力をかけて遠方に出かけ、自分の足で調べて回るには当たらないと考えるのが普通だろう」と。ボアイエ p 30

観光旅行の目的地 旅が観光的になってくると、シャルル・エティエンヌに端を発する旅行者のための地図や旅程、旅程に沿った「見るべき物」の説明などが、相互に内容をコピーしたり、参考にしたりとたくさん刊行されるようになる。ボアイエは、英仏独などで刊行されたガイドブックや旅日記を詳しく参照しながら、16世紀から17世紀にかけての人気観光地を紹介している。これによると、目的地として最初に選ばれたのはイタリアであり、何といても主役はローマであった。ただし、カトリック総本山の所在する巡礼地ローマではなく、関心の対象は古代ローマ帝国時代の遺跡訪問中心へと変わっている。コロセウムやパンテオン、あるいは大浴場跡、水道橋、円形劇場などである。

古代ローマ帝国への興味という点では、フランス南部も遺跡に満ちているから、イタリアへ行く途中で多くの観光目的客が訪れるようになった。16世紀から17世紀にかけてのガイドブックや旅行記には、古代ガリアの首都であったリオンを筆頭に、ピラトの町として知られるヴィエンヌ（ガリアに流されてここで自殺したという伝承による）、ポン・デュ・ガール、ニームのメゾン・カレや闘技場、ローマ帝国の第二の首都であったアルル、エクス・アン・プロヴァンスなどが人気観光地であった。

反動で中世的なものは否定され、教皇庁が一次移されていたアヴィニョンでさえかろうじて登場するにすぎず、どんなに素晴らしいゴシック建築も無視され、軽蔑の対象にさえなったという。とはいえ、中世キリスト教的なものがすべて否定されたわけでもなく、奇跡の地とされる場所もリストアップされており、巡礼旅行者はもとより人文主義者の旅行者も立ち寄っている。そうした例として、ボアイエはこの時代に新たに登場したドーフィネ地方のグランド・シャルトルーズ（修道院）などいくつかをとり挙げて説明している。詳細は省略するが、そのような場所はすでにカトリック教徒だけのものではなく、世俗人やプロテスタントなど、誰でも受け入れられて、すでに人気観光地のように賑わったという。

旅を好まなかった古典主義者 ボアイエは、記録に残されている多くの旅の記録を分析し、16世紀後半に貴族ないし上流階級の中に観光旅行ブームと呼べる状況があったことを立証したうえで、17世紀はむしろ観光旅行への意欲が減退し、1661年に始まるルイ14世の親政時代には、旅に出歩かないことをよしとする価値観が支配していたと書く。

ポール・アザールも「ヨーロッパ精神の危機」の冒頭（第1章『静から動へ』）でこのことに触れ、次のように書いている。「同じ状態を保つこと、奇跡的に生まれた均衡を壊しかねない一切の変化を避けること、これが古典主義時代の願いだった。危険なのは不安な心をそのかす好奇心である。旅人はたとえ世界の果てまで行っても、自分の内にある人間の条件しか見出すことはできないのだから、もともと好奇心をもつのはばかげている…。(中略) 古典主義精神はひたすら静止を愛した。できれば静止そのものであろうとした。ルネサンスと宗教改革の大冒険のあとに沈思の時が訪れたのだ。政治も宗教も社会も芸術もとめどない議論や不満げな批判を脱し、人間の笹舟は安息の港を見出した」。そして、古典主義時代の代表的文化人であったラシーヌ(1639~99)もボアロー(1636~1711)も旅を嫌ったし、ボシュエ(1627~1704)もフェヌロン(1651~1715)も生涯ローマにも行かなかったなど、当時の文化人や作家たちが旅に背を向けていた例証を挙げる。他方、ボアイエは、この時期を18世紀の後半に始まる「観光維新」を準備する《移行期》と呼び、彼の表現によれば《室内楽》を尊んだ時代なのであった。

それが、17世紀末から18世紀初頭の世紀の変わり目になると、まずイタリア人が旅行好きの先祖の気質を取り戻し、フランス人もじっとしておれなくなる。ドイツ人の旅行好きは国民癖のようなもので、彼らを家に引き留めておくことは不可能であった。そして、イギリス人はもっと活発に動きはじめる。18世紀に入ると再び静から動への転換が行われるのである。

氾濫する旅行記と旅行案内書 17世紀を通じて旅行者数はさして増えなかったが、旅行記は氾濫した。ポール・アザールの記述を借りれば、境界がはっきりせず、学問的な論述でも博物館のカタログでも、あるいは恋物語でも、みんな突っ込める大変便利な「旅行記」という文学ジャンルが流行したのだという。それらの中には学問的なうんちくを傾ける堅苦しいものも、心理的な研究も、純然たる小説もあり、それらを全部いっしょくたにしたものもあった。これらを批判するにしろ賛辞を呈するにしろ、17世紀は旅行記なしには済まされない時代になっていた。未知の遠隔地に旅ができた特権者はその見聞と体験を披露して当然という風潮であり、読者は好奇心いっぱい読み漁ったのであった。同じ風潮から、旅行案内に類する図書も広狭各地域の案内から項目別の見所案内まで、各国で次から次へと出版されている。アザールは1680~1715年に出版された旅行案内書を14種列挙し、さらには、それらを引用した書物の事例などもふんだんに紹介して、この時代の人々の旅への関心の在り方を説明している。

イギリス人はさらにその上に行く。第3部第4章で紹介した *The Oxford Companion to Travel Writing* (2002) の「1500年から1700年までにイギリスで出版された旅行記・航海記の種類別出版数」によれば、英語のオリジナルのものが383種、他国語からの翻訳が160種、合計543種も刊行されている。大半は17世紀のものである。このうちヨーロッパ外への航海・旅行記はすでに紹介したが、ヨーロッパ内の旅行記が100種、旅行案内書も31種刊行されている。どのような基準によるカウントなのか不詳だが、17世紀の旅する人々

が好んで旅行記を出版し、人々が関心をもって読んだことは明らかである。

こうした時代背景のもと、18世紀半ばに「観光維新」が到来する頃には、フランスは観光目的地としてイタリアに拮抗するまでになっていた。そして、そのイタリアとフランスを最も多く旅したのが新興国イギリスの上流階級であった。

2. 英国人のグランドツアー

この時期に、それまでとはまったく異なる新しい旅をイギリス人が始める。その第一が今日グランドツアーの名で知られる長期間のヨーロッパ大陸旅行であり、二つ目が夏季の温泉地や海浜での滞在である。いずれもイギリスの経済成長を反映するもので、18世紀半ば以降、これらの旅は産業革命の進展とともに大きく展開していく。格別の用務のない自発的な旅行者が増え、目に立つ社会現象にまで成長し、やがてその種の行動がツーリズムと呼ばれるに至る。ツーリズムは近代ヨーロッパの新しい現象として、名実ともにイギリス人によって始められたのである。

17世紀のイギリス イギリスの17世紀も政治の激動期であった。継嗣のなかったエリザベス一世の死（1603年）によって、スコットランド王ジェームズ六世がイングランドのジェームズ一世として即位して以来、議会の経験のない王と議会が激しく対立し、その子チャールズ一世のときに清教徒革命が起こって王が処刑される。一時的に共和制に移行したが、指導者のオリヴァー・クロムエルの死によってチャールズ一世の王子がチャールズ二世として即位し、王政が復活した（1660年）。しかし、そのチャールズ二世の死後、共和政時代にフランスのルイ14世のもとで育って強固なカトリック教徒となっていた王子がジェームズ二世として即位（1685年）したことによって、新たな宗教紛争が起こる。結果は、カトリック王ジェームズ二世の追放と議会の優位を定める権利章典の成立で決着し、立憲王政というべき新しい制度が誕生した（名誉革命、1689年）。権利章典にもとづいてオランダからウィリアム三世（オラニエ公）と王妃メアリ（ジェームズ二世の王女）を迎え、両者の共同統治の時代となって安定期に入る。この時期以来清教徒支配の禁欲政治からようやく開放されて、イギリス貴族の間では、生活を楽しむ風潮が支配的になっていく。ここではエリザベス一世なきあとのスチュアート朝の市民革命の動きを簡単に追ったが、イギリス貴族の特性については、別途産業革命の背景としてもう一度取り上げることとする。

まずは、17世紀に始まり、18世紀に「社会現象」となっていくグランドツアーについて見てみよう。

グランドツアーの始まり 16世紀末までのイギリスはヨーロッパの辺境にあって、イタリア、フランス、スペイン、オランダの後塵を拝し、まだ小国に過ぎなかった。エリザベス一世の時代に若い貴族の中から優秀な人材を選んで国費で先進国に留学させていたというが、17世紀に国力が充実してくると、学業の終了時に子弟を文化先進国であるイタリアやフランスに半年から2年間くらい自前で遊学させる貴族が増えていく。17世紀に始まった

こうした若者の長期の《修学旅行》が18世紀に一段と盛んになり、この新しいタイプの長期旅行が〈ザ・ツアー〉あるいは〈グランドツアー〉の名前で呼ばれるようになる。昔ながらの〈travel=旅〉という言葉では表現できない新しい旅行の形態だったからである。語源の〈ろくろ〉から周遊型旅行を表現するために採用された新語であり、あくまでイギリス人のみの用法であった。ちなみにフランス語の **tour** は《ろくろ》のままであり、その後も長らく旅行の意味では使われなかった。

それ以前には無かった新しい旅の形態ではあるが、さりとて無から生じたというわけでもない。ボアイエによれば、中世末期のヨーロッパでは優秀な学生たちが学業の終わりに著名な大学を渡り歩くことが多く、ボローニャ、マントーヴァ、モンペリエなどを訪れて学問の仕上げをしたという。すでに紹介したプラッター兄弟の遍歴をはじめ、パリ大学で学んだ学生が医者になるためにモンペリエに行き、さらにイタリアにまで足を伸ばすような例は多かった。このような学生たちの旅がグランドツアー誕生の背景にあったのではないかという。もっとも、彼らのように自力で旅する学生たちと違って、イギリス貴族の子弟の場合は、親の金と支援で国際人としての教養を高めるべく送り出され、戻れば社会の最上層を形成することが約束されていた。それゆえ17世紀から18世にかけての時期は、大学卒業時に旅してまわるイギリス貴族の若者たちと、学殖豊かな文化人がさらに学問を求めて旅するという二種類のツアーが混在していたのであった。

こうした教養旅行を〈ツアー〉と呼ぶようになったのは17世紀も終わりに近いところで、最初期の使用例はジョン・クレンチ **John Clenche** の **A Tour in France and Italy made by an English Gentleman (1676)**、および **William Bromley** の **Remarks in the Grand Tour lately performed by a person of quality (1692)** である。また、フランス人ボンヌカーズ・ド・サンモーリス **Bonne Case de Saint-Maurice** は、1672年に次のように書いている。

外国人（英国人を指す）たちは、オルレアンからブルターニュのナントに至るロアール川沿いの町や見どころを訪ねて回るのを小（プチ）ツアーと言い、グランドツアーと言えば、これらの町以外にギュイエンヌ、ラングドック、プロヴァンス、ドーフィネなどの地方からリヨンに出てパリに戻るような旅行を言い、北の方からくるドイツ人やスエーデン人、ポーランド人などは、フランシュ・コンテとかジュネーヴを経由してやってくる。彼らの中にはイタリアにまで行く人たちも多い。

かくて、18世紀初頭のイギリスでは **the tour**、**the grand tour**、**to tour**（動詞）の三通りの使い方が現れている。**the tour** は教育的な旅行を意味し、具体的には大陸に旅して若い英国貴族が教育の仕上げをすることであった。この周遊旅行は長ければ3～5年にも及び、ヨーロッパ大陸で見るべきものをすべて見てまわる大旅行は **the grand tour** と呼ばれた。英国人が発明したこの《ツアー》の概念はフランスには存在せず、英語の **tour** はフランスでは長らく単に **voyage**（旅行）と訳されていた。

なお、*tourist* という言葉はザ・ツアーを行う人を意味する言葉（形容詞でもあった）として 18 世紀末のイギリスに出現した。フランス語では 19 世紀中ごろになって *touriste* が外来語として使用されるようになるが、その意味は《旅するイギリス人》であった。

グランドツアーの種々相 グランドツアーは若いうちに外国旅行をさせることに優れた教育効果があるとする新しい概念による旅の仕方で、旅行期間は 1～3 年が普通だが、長いものは 5 年におよぶものさえあったという。いささかこれ見よがしの大名旅行の観もあるが、そもそも、島国に閉じ込められて遅れをとることを怖れたイギリスのエリート層が、世界市民ないしコスモポリタンであろうとする意図から発したものである。

彼らの行く先はフランスとイタリアが必須で、ほかにはスイス、オランダ、スペインに回る人もあった。このような大旅行をするには当然大金がかかるから、富裕になったイギリスの貴族階級の子弟に限られたが、勝手にわからぬ外国への長期旅行ゆえに一人で行かせるのは無理で、学者や文化人を家庭教師兼通訳ガイドとして同行させるのが常であった。イギリスの多くの学者たちがその恩恵を受け、自力ではできない大陸訪問ツアーによって見聞を広め、各地の学者や文化人との交流によって知識や教養を磨くことができた。本城靖久「グランド・ツアー」が例示している《家庭教師》を経験した著名人には、トマス・ホブズ（1588～1679）、ジョン・ロック（1623～1704）、アダム・スミス（1723～90）などの超一流の学者をはじめ、劇作家のベン・ジョンソン（1572～1637）、桂冠詩人のウィリアム・ホワイト（1715～75）、随筆家で政治家のジョゼフ・アディスン（1672～1719）など、その後のイギリスの歴史に名を残す錚々たる名前が連なっている。

グランドツアーについては後世大いに研究され、沢山の研究書が出されている。日本では上述の本城靖久「グランド・ツアー：英国貴族の放蕩修学旅行」（中公文庫）が関連資料を渉猟して面白くまとめている。旅の準備、旅行中の注意事項から、交通（馬車）や宿泊の状況、彼らの行動の種々相が描かれている。平均して 18 歳程度の若者たちのたっぷりお金をもつての旅であるから、当然勉強より遊びに精を出す者もおり、はなはだしい無駄遣いぶり、ハメのはずしぶりも紹介されている。

当然のことながら、識者と称される文化人の中にはこれら〈若様たち〉の行状をにがにがしげに批判する人たちも多かった。自ら家庭教師として同行した経験のある哲学者ジョン・ロックは、旅の教育的効果を高く評価しながらも、大学の後半をグランドツアーにあてて学業を終了するやり方について、大金をかけて外国旅行から何かを学ぶのに 16～21 歳は若すぎてろくに吸収できないだろうといている。また、彼はグランドツアーに家庭教師が同行することにも批判的であった。野心も常識もなく気位だけ高い平凡な貴族の若者が、身分が下の家庭教師を見下しているのではよい影響を及ぼせるわけがないといい、金があるなら教育目的の旅を 2 回させることを勧める。すなわち、最初の旅行は 7～14 歳までに家庭教師付で行かせ、とくに外国語を学ばせる。次に 21 歳を過ぎてから付き添いなしにツアーに出すのがよいだろうと言っている。

他方、詩人のアレクサンダー・ポープ（1688~1744）は「愚物物語」の中でグランドツアーに出向く若者を取り上げ、「彼らはヨーロッパを見物し、ヨーロッパは彼らを見物する」と歌い、次のような対句で嘲笑している。（290~320行）

若きイギリス人は、グランドツアーに出かけ、
すべてを見るが何も理解せず、
キリスト教世界のあらゆる悪徳を拾い上げ、
自国語を失なう一方で、他国の言葉は理解せず、
古典主義の土地に出向いて古典の知識を全部捨ててくる。

もともと若様たちが自分で旅行記など書くはずがないから、彼らの行動を苦々しく思っている大人たちの批判ばかりが目立つが、中でもトバイアス・スモレットとかモンタギュー夫人といった人々の批評がとくに手厳しい。本城靖久「グランド・ツアー」には『グランドツアーの批判者たち』という項目があって、若様たちの行動を面白くまとめている。なお同書は副題を〈英国貴族の放蕩修学旅行〉としているが、内容は貴族子弟の旅だけではなく、17世紀後半から19世紀にかけてフランスやイタリアを旅し、旅行記を残した人たち（前述のほか、カザノヴァ、モーツアルト父子、アーサー・ヤングなど）の記録をもとに、フランスとイタリアの旅事情を詳しく紹介しているので一読に値する。また、交通や宿泊などのサービスについても適宜紹介しているが、これらについては別途採り上げる。

グランドツアーの目的地：フランスとイタリア グランドツアーの主たる行く先はフランスとイタリアで、この2国を欠いてはグランドツアーにならないといっている。本城の「グランド・ツアー」は、第1章でグランドツアー全般の解説をしたあと、第2章「若様、花の都へ」、第3章「南フランスに行く」、第4章「イタリア修学旅行」という筋立てで、フランスを通過してイタリアへ向かう典型的なコースに沿って説明する構成になっている。

イギリス人にとっては、陸続きの大陸ヨーロッパ諸国相互の往来ではなく、「海外旅行」である。まずは出国港のドーバーまで行く。貴族なら自家用馬車で行く者も多いだろうが、馬車の戻しを考えれば、ドーバー・コーチという駅馬車を使うのも便利である。駅馬車はロンドン中心部のチャリングクロスを早朝4時に発ち、馬を5回替えてドーバーまで一日がかりの旅である。船の旅は交通サービスの項で触れるとして、この時期の旅につきものの煩わしくも理不尽な入国・通関を通り抜け、カレーに到着する。カレーでは最低一泊して、中古の馬車を調達するか、乗合馬車でパリに向かう。後述するように、カレーには立派なホテルがあって、常時中古の馬車が40~50台あってその中から選んで買う。帰りにはまたここで売り払って……というわけである。

最初の外国の地カレーでの若様たちの興奮ぶり、道中のフランスの街道の素晴らしさ、そしてパリでの愉快で楽しい滞在などが詳しく描かれているが、これは省略する。パリ滞在を終えると、カザノヴァがヨーロッパ第一の道路と絶賛する幹線道路をリヨンまで下り（途中でシャロンからソーヌ川をリヨンまで船で下るオプションもある）、そのあと南仏経由地中海に

出て、あるいは、リヨンから東にアルプスに向かい、モンスニ峠を越えてイタリアに入る。帰りもどちらかのコースが選ばれるのが普通であった。ただし、アルプス越えの道は、19世紀までは馬車で通るのは不可能で、乗ってきた馬車を売りに出すか、分解して人足とラバをやとって運ばせるしかなかったという。

第一の南仏回りのコースでは、馬車で行くかローヌ川を下るか、ともかくアヴィニョンに出る。当時の交通事情では船旅の方が快適で、本城の「グランド・ツアー」に1802年にこの船旅を経験したマウント・キャッセル伯爵の話が紹介されている。これによると、一行は馬車3台に分乗する13人の大部隊だったが、馬車ごと全部乗せてまだ余裕があり、フランス人が3人便乗できたという。アヴィニョンまで3日から5日の船旅であった。アヴィニョンからは南仏のローマ遺跡などを観光しながらニースへ抜け、ニースからジェノヴァに船で行くのが一般的なコースであった。第二のアルプス越えはモンスニ峠を越えてトリノに抜けるコースである。こちらは恐怖の体験と恐れられていたが、ルソー以後自然美に目を開かれて、アルプス越えを選ぶツアーリストたちが増えたという。もちろんルソーによって一躍注目されるようになったジュネーブに向かい、レマン湖を訪れ、当時ジュネーブ郊外のフランス領フェルネに住んでいたヴォルテールを訪ねるコースを選ぶ人も多く、これもグランドツアーの一コースとして紹介されている。

イタリアの章は、①北イタリア諸都市（トリノ、フィレンツェ、ジェノヴァ）を巡ってからローマへ向かい、②ローマでは長期に滞在し、ついで、③最南端の目的地ナポリを見たあと、④北上してボローニャ、パドヴァを経てヴェネチアを楽しみ、④帰途に再度パリを経て帰国するという旅程である。イタリアではルネサンス美術、オペラ、古代ローマ文化などが鑑賞ないし教養として身につける対象であり、女性との情事も旅行記等の文献を引用して語られる。

受け入れるイタリアの視点から書かれた岡田温司「グランドツアー：18世紀イタリアへの旅」（岩波新書）は、地域別ではなく、第1章「人：イメージの中のイタリア人」、第2章「自然：『驚異』の風景」、第3章「遺跡：ポンペイ発掘の衝撃」、第4章「美術：ローマとヴェネチアの賑わい」と、項目別にグランドツアーリストたちの鑑賞の対象と行動を整理している。両書とも入手が容易なので、細部はこれらに譲るとして、ここでは古代遺跡の発掘についてのみ概要を見ておこう。

グランドツアーが促進したポンペイの発掘 紀元後79年、ヴェスヴィオ火山の噴火によって周辺の都市や町が埋没した。1700年もの長い間忘却の彼方に沈んだあと、まずヘルクラネウムの遺跡が発見された。発見者はスペイン継承戦役で神聖ローマ皇帝ヨーゼフ一世の将官になり、ナポリ王女と結婚したフランスの貴族エルブフ公エマニュエル・モーリスである。ナポリ南方8kmのポルチニに邸宅を建て、付近に井戸を掘っていて（1709年）偶然ぶつかったのがヘルクラネウムの劇場跡であった。ほかに神殿らしき跡から彫像や銘板なども出土した。

遺跡の発掘が本格的に始められたのは1738年からであり、ポンペイで発掘が始まるのはその10年後の1748年以降である。折しもグランドツアーの来訪客がナポリにまで南下してくる時代であり、岡田は新しい古代遺跡の発掘はグランドツアーなしにはあり得なかったらうと言う。少なくとも、グランドツーリストの存在が発掘を大きく促進したとはいえるであろう。小人数が手作業で発掘は中々進まなかったが、エルブフ公から発掘事業を受け継いだナポリ王カルロス三世は、付近に遺跡からの出土品を展示する博物館を造らせ、不十分なが遺跡の荒廃や盗掘を防ぐために入域を制限した。1757年には「ヘルクラネウム出土の古美術品」なるカタログを編纂させ、600点以上のヘルクラネウムとポンペイの出土品の銅版画が収録された。この豪華なカタログは、ナポリ王が要人にプレゼントするのが主たる用途であったが、簡略版が出されるやたちまちヨーロッパ中に広まり、1773年に英語版、1778年にドイツ語版、1778年にフランス語版が刊行された。その後も編纂事業が続けられて最終的に1792年に全9巻で完成し、古代ローマ時代の美術に係わる貴重な知識の宝庫となった。

グランドツアーの衰退 グランドツアーは17世紀に始まって旅の世界に革新をもたらし、18世紀の中頃に全盛期を迎えるが、世紀の最後の四半世紀にはフランス革命の混乱とこれに続くナポレオン戦争によって中断した。再開される頃にはイギリスの産業革命の進展で富裕階層が増え、大陸へのツアーが一般化するにおよんで貴族階級の子弟の特権的な修学旅行は衰退していく。1821年にはドーバー海峡に蒸気船が就航し、1830年以降鉄道が普及するにつれて旅が容易になり、グランドツアーは終焉を迎えるのである。

3. 滞在型観光の誕生：上流社会の夏の楽しみ

グランドツアーより少し遅れ、17世紀末から18世紀中頃にかけて、やはりイギリスの上流階級が始めた観光が二種類の夏の滞在型観光であった。ひとつが温泉地での滞在、もうひとつが海岸での滞在である。グランドツアーは大学教育の仕上げという裕福な貴族の若者の特権であったが、滞在型観光は上流社会の本隊の観光行動である。二つのタイプの滞在のはしりとなったのが温泉地ではバースであり、海岸滞在ではブライトンであった。ここで注意すべきは、温泉地と海岸での滞在といっても、通常の温泉療養や海水浴といういつどこで始まったとも知れぬ慣習の延長線上のものではなく、18世紀の英国貴族が始めた《社交重視の夏の保養地滞在》という全く新しい行動パターンだったことである。

温泉保養地の誕生

温泉自体は古代ローマ時代から利用されていた。ローマ人は帝国内のあちこちに温泉を開発し、アクア、エクス（いずれも水の意）など、多くの町名にその名残を残しているほか、大都市にはどこにでも浴場を作って入浴の習慣を一般化させていた。しかし中世になると、キリスト教の浸透とともに、肉体の蔑視ないし肉体の快樂への抑制が入浴行為自体をすたれさせてしまった。中世では、温泉でも入浴より鉱泉水の飲用による病氣治療が主体であ

った。ヨーロッパにおける温泉の利用と入浴の歴史は日本のそれと大きく異なり、それ自体が興味深いテーマであるが、これについてはドミニク・ラティ「お風呂の歴史」（高遠弘美訳）が詳しく説明しており、また、その訳者解説が日本人の温泉利用との相違を面白く紹介しているので、そちらに譲ることとする。

よってここでは、ヨーロッパならではの夏季の長期リゾート滞在という慣習を誕生させた英国貴族の行動、より具体的には、ロンドンを離れた社交目的の保養地滞在という形態の観光についてみて行こう。

バースの《革命》 バースは先住民ケルトの時代から温泉地として知られていたが、紀元2世紀以降ローマの支配下に温泉の町として発展した。中世には廃れてしまったが、エリザベス一世の時代に復興し、再び温泉地として使われるようになったが、1700年にはまだ人口2000人ほどの小村でしかなかった。その小村が、100年後の1801年に人口は15倍の30,000人に増え、英国第8位の都市に成長していた。バース成功の要因は温泉水の質や歴史の古さによってではなく、この町を上流社会の夏の社交場として意図的に育て上げた結果である。その大なる推進役を果たしたのが、1704年にこの町のマスター・オブ・セレモニーになったリチャード・ナッシュ（1674～1761）であることはよく知られている。

イングランドの共同統治者であったウィリアム三世とメアリ女王が相次いで亡くなり、権利章典の定めに従って後を継いだのはメアリの妹アンであった。アン女王（在位1702～14）は即位する前の1688年に、流産の後遺症を癒すために夏の数か月を田舎の温泉町バースで過ごした経験があり、即位の1702年にもまたバースに滞在した。女王のバース滞在は貴族階級の注目を浴び、夏の間ここで過ごす貴族たちが増えた。この事実と有閑貴族たちが慰楽を求めはじめた時代背景を利用して、戦略的にバース滞在を貴族社会の流行^{ファッション}にまで誘導したのがナッシュであった。

小林章夫「イギリス貴族」によれば、18世紀はじめのイギリス貴族社会の生活は、1年の3分の2は田舎の領地にあるカントリー・ハウスで過ごし、春が訪れる4月から7月にかけての《シーズン》には大挙してロンドンに出て、華やかな社交を繰り広げるのが慣例であったという。そのために、ロンドンにそれぞれが豪華なタウン・ハウスを設けて滞在した。シーズンが終わり、暑い夏になるとロンドンを脱出して領地へ帰ったが、土地の名士たちを家に招待し、周辺の小地主や牧師の奥方などに囲まれるだけの社交生活に飽きたらず、ロンドンでのように同じ階級の人々との社交生活を過ごす別の場所を必要としていた。そうした時代の要請に対応したのがバースをはじめとする温泉地であり、エプソムのような競馬場であった。端的に言えば、退屈な日々を逆転させるために、首都ロンドンの生活を夏場には温泉地に移動させたのであった。その中でバースが最もよく適応し、社交シーズン中であってさえ宮廷が定期的にバースに移動するようになり、数千人の貴族が集まったという。そこにまでに至らしめたのがナッシュの才覚であった。

ナッシュはダンディな野心家であった。オクスフォード大学を中退し、軍隊に入ってもうまくゆかず、法律家を目指したが失敗した。結局ギャンブルで大儲けして金持ちになり、

社交術を極めることによって社交界の名士となったという人物である。彼の死の直後に伝記を書いたゴールドスミスによれば、ナッシュは上流階級に暇つぶしの種を提供するだけでは満足せず、様々な楽しみを厳格なエチケットのもとで享受することを求め、《見知らぬ者同士の交際の仕方》を伝授した。つまり、バースは温泉治療という表向きの滞在のほか、ナッシュの指導下に、有閑階級のためのエレガンスの基準、遊戯のルール、社交の基本などまで作り上げて教育したのであった。

18世紀の中頃には、滞在中の新しい楽しみ方をあれこれと工夫した。街の散策、コンサート、多様な舞台劇、舞踏会などなど、正装して参加する行事が毎週のように行われ、温泉浴や鉱泉水の服用などそっちのけで楽しんだのであった。芝地を囲い、ルールを決めてテニスなどのスポーツを始めたのも彼であった。ここでひと夏を過ごすことで人々は社交術において《進級》し、成り上がりの新富裕者を伝統的貴族階級に接触させて教育した。階級違いの接触などロンドンの社交界ではあり得ないことだったが、結果として両者にプラスとなり得る《身分不釣り合い》の結婚の機会をも提供したのであった。

作家のトバイアス・スモレット（1721~71）は何度もバースに滞在している。その時の経験をもとに書いた作品「ペルグリン・ピクル」（1751）の中で、持参金を求めて女を探す男たちや結婚相手を追いかける女たちの様子など、バースの社交界を面白く描いている。実際、寡夫になって借金に苦しんでいたバイロン卿がバースで2300ポンドの年金をもつスコットランドの金満家のミス・キャサリン・ゴードンを配偶者に得て、そのカップルから生まれたのが詩人バイロンであることは、英国ではよく知られている。こうした結婚は政略結婚で、愛情を伴わないことも多く、親は子供を乳母に預けっぱなしで社交にいそしむことにもなる。バイロンは母親にも乳母にも可愛がられず、不幸な少年時代をおくったことを自ら告白している。（「英国カントリー・ハウス物語」 p 102）

ともあれ、ボアイエによれば、この経験がスモレットをして、オフシーズンの陰鬱な冬に、健康的な南仏の保養地におけるイギリス人貴族階級の社交界を発想させるきっかけになったらしい。なお、南仏の避寒保養地の誕生についてはあとで採り上げる。

温泉の館（テルメ）と街づくり 注目すべきことは、バースがこれ以降の各地の温泉町の町づくりモデルとなった点である。われわれは、今日のバースのローマ風呂や円形広場（ザ・サーカス）など多くの建造物や公園を知っている。バースの市街地は1987年に世界遺産に登録され、泉源は今日でも46.5℃の温水を1日125万リットル湧出している。紀元2世紀にローマ人が城壁で囲んで温泉町として開発し、ローマ人が退去した後、建物は放置されて廃墟になって埋没していたが、温泉自体は中世も利用され続けた。上述のとおり18世紀に入ってバースの温泉が注目され、再開発がはじまった。1727年に下水管を設置する工事が行われた際にローマ時代の大浴場跡が発見され、その後の発掘調査によってローマ時代の浴場の様子が明らかになった。

バースの街を今日のような姿に造形したのは、バース出身で18世紀イギリスの最高の都市計画者といわれる建築家ジョン・ウッド父子である。父のジョン・ウッド（1704~54）

はロンドンで建築学を学び、1727年からバースの市街地の大胆な造形を設計して建設を開始し、彼の死後息子のジョン・ウッド（1728~82）に引き継がれて完成した。



ローマン・バス



バースのサーカス（円形広場）

なお、ローマ時代のバースの復元図や浴場のローマ風建物、貴族階級のための今でいえば「リゾートマンション」などの様子が、2013年3月10日、TBSの番組「THE 世界遺産：2000年つづく温泉郷」で詳しく紹介されたのでご覧になった方も多いであろう。

今日われわれが見るローマン・バースの建物も、古代ローマの建築様式を採り入れたウッド父子の作品であり、これらがイギリスはもとよりベルギーのスパ、フランスのクス・レバン、イタリアのモンテカティーニその他の有名温泉地の殿堂や街づくりのモデルとなった。かくして、バースは温泉治療というより貴族の社交場として華やいだわけだが、同時代のフランスの温泉場はこうではなかった。たとえば「ルブラン神父の手紙」（1751年）は、イギリスと大陸の温泉場の違いについて次のように述べている。

バースを大陸のブルボン温泉（フランス中部にある当時人気のあった温泉）と同じようなものと考えると大間違いである。ブルボンには病人、麻痺患者、虚弱者しかいないのに、バースは健常者が自分の健康を最大限活用するところなのだ。（ポアイエより）

しかし、繁栄するバースも18世紀末が近づくと、その成功ゆえに衰えていく。

ミドルクラスまでがバースにやってくるようになり、真の上流階級は居心地が悪くなり、別の場所を求めようになったからである。マスツーリズム時代になって、リチャード・バトラーらが「観光地発展段階論」で論じたように、客の質が下がると特権的な当該観光地の発見者たちは、そこを見捨てて新しい天地を求めてよそへ行ってしまふのである。悪貨が良貨を駆逐する「グレシャムの法則」の観光版だとボアイエはいう。そして、バースに代表されるイギリスの温泉地の繁栄を引き継いだのが、海峡の向こうのベルギーのスパを先駆とする大陸の温泉地であり、もうひとつが温泉地ならぬイングランド南部の海岸ブライトンであった。

大陸の湯治場

今日の大陸の温泉場は、中世には放置されていたローマ帝国時代に原初をもつ温泉を復活させたしたものが多い。もともと温泉場は山中とか交通不便な田舎に多く、エクス・レバン、エクス・アン・プロヴァンス、アーヘン、エンディゲンなど、都市近辺とか特に有名な温泉以外は中世には利用されなくなり、泉源が枯れたり埋まったりしたものが多かった。残っていたものも地元民が利用するだけで、遠来の湯治客を受け入れる施設はないに等しかった。それが18世紀後半になって風潮が変わり、次々と復活してくるのである。もともと温泉そのものはイギリスよりも大陸のほうに多く、イギリス国内では早いうちに廃れた温泉地滞在の慣行が、大陸で大きく発展するのである。

英国のブラックウッズ・マガジン（1817年発刊）によれば、18世紀半ばに、時代の流行がイギリスの上流階級をベルギーのスパに連れてくるようになり、1789年にはスパがバースを追い越しただけでなく、大陸の10ほどの温泉町がこれに追随しようとしはじめていた。フランス中東部の湖畔の温泉地エクス・レバン（当時はエクス・アン・サヴォアと呼ばれていた）を管理するサヴォア州知事は、1783年、泉質も町の魅力も劣るスパがこんなに成功しているのをみれば、わが町エクス・レバンならはるかに多くの外国人上流階級客を誘致できるはずであるとして、そのためのプロジェクトを国王（当時サルディニア王国に属していた）に提出した。その記録が保存されており、これによると、ヨーロッパ諸国の貴族階級の数を考えれば、年間200万フランを超える収入がもたらされるであろうと推測している。

1793年にライハルトのガイドブックが、スパの客について「多くの客は、湯治もさりながら、スパで得られる様々な楽しみを目的にやってくる」と書いているとおり、湯治目的以上に有閑階級の社交や遊びの需要が大きく、他の温泉地もこれを見習おうとしはじめていた。

湯治場と医学 話は前後するが、ここでヨーロッパの当時の温泉治療についての概要を見ておこう。ローマ帝国の時代から温泉に医療効果があることは認められていたが、その医学的根拠となるとあいまいであり、それは18世紀の温泉地でも同じであった。地元の住民たちは病気や怪我などの際に飲用し、あるいは温泉、泥湯、蒸気泉に身を浸して苦痛を和らげようとしたが、それらは医師の診断や処方によるものではなく、勝手に効用を信じて

利用していたにすぎなかった。したがって、どんな疾患にどの温泉が有効かという客観的評価は存在せず、人が大勢行くことが効果の証明であった。温泉地に人が来るようになってはじめて湯治場として公認されるのであって、その逆ではなかった。ある病に効くということになると、その病に苦しむ貴族が訪れても地元民と同じ施設を利用するしかなく、貴族としての《正当なる扱い》は受けられなかった。

だが、18世紀も3分の2が過ぎるころには温泉への見方が変わってきて、地域の責任者たちが温泉場を意図的に整備するようになる。地方行政官や百科全書派、その他の社会批判勢力から温泉管理の不備の訴えが出始め、19世紀に入る頃には知事自身が温泉源の管理が不十分であることを気にしはじめる。泉源の所有者が誰であるにしろ、勝手に温泉を掘り、施設も作らずに利用させて何の保護措置も取らないままでは、泉源が容易に汚染され、不衛生であり、利用者の不満が高まっていく。当初、利用者はキャンプを造ったり、民家に泊めてもらったりするしかなかったのだが、そのうちに農家が旅籠屋に転業する例も出はじめ、環境整備がはじまるのである。

18世紀半ばまで、医者には都市にしかいなかった。つまり湯治場に医者はいなかったのであるが、それで治療者に不満があるわけではなかった。ルイ14世時代に貴族階級が湯治にやってきたピレネー山中のバレージュにさえ薬剤師すらいなかったし、南仏のヴァル・レ・バンに医師が常駐するようになるのは1779年以降だという。正規の医師は温泉のような自然発生的な大衆医療など無視していたのである。少なくとも17世紀いっぱい、温泉治療は医事というより奇跡願望に近かった、とボアイエは言い、セヴィニエ夫人(1626~96)が娘に宛てた次のような手紙を引用している。

ヴァル温泉が正反対の疾患のどちらにも効くなんて奇跡ですね。もし本当にあったことだと知らなければ、モリエールの医者(「気に病む男」)に出てくる喜劇としか思えません。

今日でさえ、温泉は奇跡をもたらすことがあると言われたりする。奇跡とはなぜ治癒したかを説明できない時の言い方であるから、当時であればなおさらであった。医者なら何か説明しようとするかもしれないが、医者はいなかったから、もし治れば奇跡ということになった。要するに温泉を管理する者はおらず、規制もない。処方する者もいなければ、含有物質を知っている者もおらず、どれだけの期間服用すればいいかの決まりもなかった。当然相反する推奨などもありうるわけで、温浴者であれ飲用者であれ、結局自分の好きなように利用していただけであった。

すべてが変化し始めるのはラヴォアジエ(1743~94)による水の研究以降である。彼は水が元素ではなく水素と酸素の化合物であることを証明し、1770年に「水の性質」を発表した。これ以降すべての水が飲料に適するわけではなく、《飲めない水》もあることが理解されるようになった。これは革命的な展開である。18世紀末には、金持ちは泉の水や都市の井戸水を不用意に飲まなくなり、水売りの水にも不信感をもつようになった。ゆえに、こ

のあと遠方からきれいな水を水道によって供給する水事業が発展する。当然鉱泉水の分析も始まり、よい鉱泉水はボトルに詰めて販売されるようになっていく。ナポレオンの第一帝政時代には、政府自体が温泉場の管理を厳しくするようになり、以後湯治場としての施設やサービスが本格的に整備されていくのである。

海浜リゾート「ブライトン」の誕生

1747年、医師リチャード・ラッセル（1687～1759）は、海水浴療法がリンパ腺肥大の治療に効果があるという自説を実証するためにブライトンに行った。その結果1750年に「海水浴健康法」なる論文を書き、ブライトンを保養地として推奨した。海水浴をすることは温泉につかるのと同様に健康に良いと主張したのである。これにより1750年以降イギリス人の間に海水浴健康法が受け入れられ、ブライトンは貴族の保養滞在地としてバースのライバルになっていく。繰り返すが、ここでいう海水浴は単に海に入って楽しむ昔からあった遊びとは違う。ブライトンの賑わいはバースの^{ビーチ}海浜版であり、散策、観劇、社交に健康法をミックスした保養地であって、18世紀になって初めてイギリスで誕生した新しい習慣であった（ポアイエ p 58）。事実、「海水浴健康法を好んだジョージ三世（在位 1760～1820）は、バイオリニストの一団が演奏する《ゴッド・セイヴ・ザ・キング》の調べに乗ってウェイマスで波乗り泳ぎをされた」が、これが一層流行に拍車をかけたという。（「トマス・クック物語」 p 29）

海はどこにでもあるが、リゾート化するにはしかるべき施設とサービスを整える必要がある。ウェイマス、スカーバラなどがブライトンに続き、大陸では北西海岸のディエップ、オステンド、スケフェニンゲンなどにも広がっていく。かくして、全く〈無人の空間〉でしかなかった海浜（アラン・コルバン「レジャーの誕生」）が次第に人で賑わう環境を生み出していくのだが、馬車の時代に遠方の海岸まで出かけることができるのは上流階級だけであった。本格的に海水浴場が賑わうようになるのは、旅客鉄道が海岸にまで通じ、海水浴が中産階級の娯楽になる19世紀半ば以降である。

ただ、意外なことに、大陸でも大西洋岸には海水浴目的の海浜リゾートが作られていくのに対し、地中海岸にはまったく現れなかった。冷房手段のない時代、地中海岸の夏は暑すぎて快適に過ごせず、避寒リゾートにはなり得たが、夏の地中海岸は20世紀半ばまで《無人の空間》にとどまっていた。（テーマ別論集「避寒リゾートコートダジュールの誕生」を参照）